

ディラン・トマス「おじいさんのお家を訪ねる」 (『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of “A Visit to Granpa's” from Dylan Thomas's
Portrait of the Artist as a Young Dog

坂本正雄
SAKAMOTO Masao

2002年10月3日受理

真夜中にほくは夢から目を覚ました。夢は、蛇みたいに長いむちとつなぎ縄、山道を走る脱走馬車、サポテンが生える原野を風を起ししながらどうと駆ける馬の足音がいっぱいだった。それから隣の部屋の男が「おいしい」とか「どおどお」とか叫び、舌を口の天井に駆け回らせるのが聞こえてきた。

おじいさんの家に泊まるのはそれが初めてだった。床板は、ベッドによじ登る時、ねずみみたいにきーきーいった。壁の中にいるねずみは、また別の客人がそこを歩いているみたいに、木のようにぎーぎーいった。のどかな夏の夜だった。でも少し前には、カーテンがぱたぱた鳴り、木の枝が窓に打ち付けていた。ほくはシーツを顔まで引き上げていた。そしてまもなく、本に出てくるような叫び声と、馬の足音が始まったのだ。

「どうどう、よしよし」おじいさんが声をあげた。おじいさんの声はとても若い声で、大きかった。舌が強力な蹄になった。そして自分の寝室をおおきな牧草地に変えた。ほくはおじいさんが病気なのか、それともシーツに火を付けてしまったのか見ようと思った。おじいさんは毛布にもぐりこんでパイプに火を付けるから、もし夜中に煙のにおいがしたら、おじいさんに助けてというのと、お母さんがほくに言い聞かせていたからだ。ほくは、家具に身体をこすりつけ、燭台をどすんとひっくり返ししながら、忍び足で暗闇の中をおじいさんの寝室の前まで行った。部屋の中に明かりが見えた時、ほくは怖くなった。ドアを開けると、おじいさんが「右へ」とメガホンを付けた牛みたいに大きな声で叫ぶのが聞こえてきた。

おじいさんは背筋をまっすぐにしてベッドに座っていた。ベッドがまるでこぼこ道を行っているかのようにおじいさんは左右に揺れていた。寝具の端の結び目が手綱だった。姿の見えない馬がベッド脇のろうそくの向こうの、影のなかに立っていた。フランネルの白の寝間着のうえから、おじいさんはクルミ大の真鍮ボタンの付いたチョッキを着ていた。パイプは大量のたばこを詰め込んで、ほおひげの中で煙を上げていた。棒の先で燃えている小さな干し草の塊みたいだっ

た。ぼくを見ると、おじいさんの手が手綱を離れ、土色になってしずかになり、ベッドは平坦な道でしずかに止まった。おじいさんは舌を口の中に閉じこめ、しずかになった。馬は優しく止まった。

「おじいちゃん、どうかしたの」服に火がついていたわけではないけれど、ぼくは尋ねた。ろうそくに照らされたおじいさんの顔は、真っ黒の空気にピンでまっすぐ留められ、そこらじゅう山羊ひげで継ぎを当てた、ほろキルトの布みたいだった。

おじいさんは柔和な顔でぼくを見つめた。それからパイプをふっと吹いて煙を出した。火花がまき散り、パイプの首が甲高い湿ったぴゅーっという音を出した。おじいさんは、「質問をするな」と声をあげた。

ちょっとして、「悪い夢でも見たか、ほうず」とふざけて言った。

ぼくは「見てない」と言った。

「いや、見たんだ」とおじいさんは言った。

馬に怒鳴っている声で目が覚めたと、ぼくは言った。

「おまえになんと言った」おじいさんは言った。「おまえは食べ過ぎだ。馬のことを誰が寝室で耳にするものか。」

おじいさんの手は枕の下をまさぐって、鈴のついた小さな袋を出して、そのひもを注意深くほどいた。おじいさんはぼくの手に一ポンド金貨〔訳注：1940年当時の£1は1990年の約£25の価値。1990年頃は、£1は200円くらいだったので、一万円ほどを握らせたことになる。小さな子どもには大きすぎる金額であろう〕を載せ、言った、「菓子を買いな。」ぼくはありがとうと言って、おやすみと挨拶した。

ぼくが自分の寝室のドアを閉めると、大きく、陽気に「ハイ、ハイ」と言うおじいさんの声、駆けてゆくベッドの、揺れる音が聞こえてきた。

朝、家具の散らかった平原を走る気の荒い馬、いちどきに六頭の馬に乗って、燃えるシートで馬に鞭くれる、大きくて不機嫌な男たちが出てくる夢から、ぼくは目を覚ました。おじいさんは、濃い黒の服を着て、食卓についていた。朝食が終わるとおじいさんは言った。「夕べはものすごい風が吹いていたな。」それから暖炉のそばの肘掛け椅子に座ると、火にくべる泥団子〔訳注：火力を増すために暖炉に入れるものらしい〕をいくつか作った。その後朝のうちに、おじいさんはぼくを散歩に連れて出た。ジョンズタウン村を抜け、ランステファン道沿いにある野原に入った。

ホイペット犬を連れた男が「いい朝だね、ミスタ・トマス」と言った。それから、犬と同じように痩せた姿の男が、低い木の生えた森の中へと去ると、おじいさんは言った。「おまえをなんと呼んだか聞いたか。ミスタだとよ。」男は森に入っただけでいけなかった。そういう立て札が立っていた。

いくつか小さな田舎家のそばを通った。門にもたれている男たちはみんなおじいさんに、いい天気だねえと言った。鳩がいっぱいいる森を通り抜けた。鳩が木のでっぺんに飛び上がると、翼で枝が折れた。優しい満足げな鳴き声とおどおどして大きな音を立てる翼の音の合間に、おじい

さんは野原の向こうから呼びかけるように「夜中にあの鳥の声が聞こえたらな、おれを起こして、森には馬がおりましたと言うんだぞ。」

ぼくたちはゆっくりと歩いて帰った。おじいさんは疲れていたのだ。するとあの痩せた男が立ち入り禁止の森からそっと出てきた。腕にそっとウサギを掛けていた。暖かい袖にくるまれた女の子の腕がかかっているようだった。

おじいさんのお家のお泊まりも後二日になった日に、背が低くて、弱いポニーに引かれた軽二輪馬車でランステファンにぼくは連れて行ってもらった。おじいさんは野牛でも乗り回しているつもりだった。手綱をぐっと握り、ものすごい勢いで長い鞭をびしびしふるい、汚い言葉をはき散らかして、道で遊んでいる子どもたちに怒鳴った。ゲートルを巻いた脚を広げてどしっと立ち、よたよた進むポニーの忌々しい力とがんこさをののしった。

「気を付けろ、ぼうず」曲がり角に来るたびにおじいさんは怒鳴り、ゴム製の剣みたいに鞭を引き、引っ張り、ぐいっとやり、握りしめ、振り回した。それからポニーが惨めに曲がり角を這い回るたび、おじいさんはぼくの方に振り返り、ため息混じりにほほえんで、「抜けたぞ、ぼうず」と言った。

ランステファン村の丘のてっぺんに着いた時、「エドウィンズフォード・アームズ亭」のそばで馬車を降りた。ポニーの鼻面を叩いて、砂糖をやり、「おまえは弱くてちっちゃいなあ、ジム、俺たちみたいに大きな男を引っ張るにはよ」と言った。

おじいさんは強いビールを飲んで、ぼくはレモン水を飲んだ。おじいさんはエドウィンズフォードの奥さんに鈴のついた袋から一ポンド金貨を出して払った。奥さんはおじいさんにご機嫌を尋ねた。気管にはランガドックのほうがいいとおじいさんは言った。ぼくたちは教会墓地と海を見に行った。スティックスという名の森に入って腰を下ろした。それから森の真ん中にある演奏会の舞台に立った。そこは夏至の頃の夜、演奏家がやってきて歌を歌い、それから毎年毎年、村のお人好しが村長に選ばれた。おじいさんは墓地のところに立ち止まり、鉄の門の向こうにある清らかな墓石、あわれな木の十字架を指さした。「あそこで横になってもなんにもならんなあ」と言った。

ぼくたちはすごい勢いで道を引き返した。ジムはまた野牛になっていた。

最後の朝、ぼくは遅く起きた。夢ではランステファンの海が大型船くらい長い、きらきらしたヨットを運んでいた。スティックス森の天使の聖歌隊が吟唱詩人の服と真鍮製ボタンの付いたチョッキを着て、意味のわからないウェールズ語で、出航する船乗りたちに歌を歌った。おじいさんは朝食の時いなかった。早く目を覚ましたのだ。ぼくは新しいぱちんこを持って、野原を歩いた。タウイ川のカモメや牧師館の木々にいるミヤマガラスを撃った。暖かい風が夏の方角から吹いてきた。朝霧が地面から立ち上り、木々の間を漂い、うるさい鳥たちを隠した。霧と風の中で、ぱちんこの玉は、逆さまの世界の電粒のように軽く飛んでいった。その朝は鳥が落ちてくることもなく、過ぎていった。

ぼくはぱちんこを壊し、牧師さんの果樹園を通過して、お昼を食べに戻っていった。前におじいさんが、牧師はカーマーゼンの市（いち）でアヒルを三羽買い、庭の真ん中にそれ用の池を作ったが、家の壊れ掛けた登り段の下にある溝のほうによたよた歩いて行って、泳いで、くわくわと鳴いたんだ、と言った。果樹園の小径の端までやってきて、生け垣の穴からのぞくと、溝と池の間の石庭に牧師さんが造ったトンネルと、「池はこちら」と、飾りのない字で書いた立て札が立っているのが見えた。

あひるたちはまだ、登り段の下で泳いでいた。

おじいさんは田舎家にはいなかった。ぼくは庭に入ったが、果樹を見ているはずのおじいさんは、いなかった。ぼくは庭の生け垣の向こうにある畑で鋤に力を入れている男に呼びかけた、「今朝おじいちゃんに会いませんでしたか。」

男は畑を掘り返すのをやめずに、肩越しに「派手なチョッキを着ているのを見たぞ」と答えた。

床屋のグリッフが隣の田舎家に住んでいた。開いたドアからぼくは呼びかけた。「グリッフさん、おじいちゃんを見ませんでしたか。」

床屋はシャツ姿で出てきた。

ぼくは言った。「おじいちゃんは一帳羅のチョッキを着ているんです。」ぼくにはそれが大事なことかどうかはわからなかった。でもおじいさんは夜にしかチョッキは着なかったのだ。

「おじいちゃんはランステファンに近頃行ったか。」グリッフさんが心配そうに尋ねた。

「昨日、軽馬車で行ったよ」ぼくは言った。

グリッフさんは急いで中に入った。ウェールズ語でなにか喋っているのが聞こえてきた。それから白の上着を着て、また出てきた。色縞模様つきの杖をグリッフさんは持った。大股で村の通りを歩き、ぼくは直ぐ隣を走った。

仕立屋（テイラー）で止まると、「ダン」とグリッフさんは呼びかけた。するとダン・テイラーが窓から飛び出してきた。ダンはそこにインド人の司祭のように山高帽をかぶって、座っていたのだ。「デイ・トマスがチョッキを着たぞ。それからランステファンに行ったそうだ」とグリッフさんが言った。

ダン・テイラーが上着をさがしている時、グリッフさんは大股で歩いていった。「ウィル・エバンス」。工務店の外でグリッフさんは声をあげた。「デイ・トマスがランステファンに行って、チョッキを着たぞ。」

「モーガンに直ぐ言うわ。」奥さんが金槌とのこの音でうるさい店の暗闇の中から言った。

ぼくたちは肉屋も、プライスさんの家も立ち寄った。グリッフさんは町の触れ役みたいにとこばを繰り返した。

ぼくたちはジョンズタウン広場に集まった。ダン・テイラーは自転車を持ってきていた。プライスさんはポニーの引く軽馬車を持ってきていた。グリッフさん、肉屋、大工モーガン、それからぼくは揺れる軽馬車に乗り込んだ。それからカーマーゼンの町目指してとここ出発した。仕

立屋が先を行った。まるで火事か泥棒さわぎでもあったようにベルを鳴らしていた。道の端の田舎家の入り口にいた老婆が、雌鶏が追い立てられるように中に走って入った。もうひとりの女は明るい色のハンカチを振った。

「どこに行くの」ほくは尋ねた。

おじいさんの隣人たちは、市(いち)のはずれにいる黒帽子と黒服を着た年寄りのようにまじめにしていた。グリッフさんは首を振って、悲しんだ。「デイ・トマスがまたこんなことをしようとは思わなかった。」

「二度とはないと思っていた。」プライスさんも悲しそうに言った。

ほくたちはとことこと行った。コンスティテューション丘をはい登り、ラマス通りへとがたがた音を鳴らして入っていった。仕立屋はまだベルを鳴らしていた。犬が一匹仕立屋の自転車の前をきいきい鳴きながら走っていた。タウィ橋につづく玉石の通りをごろごろと行っていると、ほくは、ベッドを揺らし、壁を震わせていた、おじいさんの騒々しい夜中の旅のことを思い出した。するとおじいさんの派手なチョッキが目に見えるようだった。継ぎの当たった顔、ろうそくの明かりの中で毛が生えて、ほほえんでいる顔が見えた。前にいる仕立屋がサドルの上で振り返った。自転車がぐらついて横滑りした。「デイ・トマスがいたぞ。」仕立屋は叫んだ。

軽馬車は橋の上をごろごろ行った。おじいさんがそこにいるのが見えた。チョッキのボタンが陽の光で輝いた。おじいさんはぴったりした黒のよそ行きズボンをはいていた。それからほくが屋根裏部屋の戸棚の中で見た、ほこりをかぶった山高帽子をかぶっていた。それから古い鞆を持っていた。おじいさんはほくたちに頭を下げた。「おはよう、プライスさん。」おじいさんは言った。「それからグリッフさん、モーガンさんにエバンスさん。」ほくにも「おはよう、ほうず」と言った。

グリッフさんは色縞模様の杖でおじいさんを指した。

「で、昼の日中カーマーゼン橋の上で何をやってると思ってるんだ。一帳羅のチョッキに古い帽子で。」グリッフさんは恐ろしい顔で言った。

おじいさんは答えなかったが、顔を川風のほうに傾けた。あごひげが踊り揺れだした。おじいさんが、まるで喋っているようだった。それからおじいさんは、かご船に乗った男たちが、亀のように、岸で動くのを見ていた。

グリッフさんは寸詰まりの床屋の看板棒を上げた。「それでどこに行こうと思っているんだ。古い黒鞆を持って。」とグリッフさんは言った。

おじいさんは言った。「おれはランガドックに埋められに行くんだ。」それから、かご船が軽々と川に滑り出し、魚のいっぱいいる川のうえでカモメがはげしく鳴いているのを見ていた。プライスさんもカモメみたいにおつぶつぶ言った。

「でも、デイ・トマス、おまえはまだ死んじゃいないぞ。」

ちょっとの間おじいさんは考えて、それから、「ランステファンに死んで埋められてもなんにも

ならん。ランガドックの土は気持ちいい。海に漬けなくても脚を動かせる。」

隣人たちはおじいさんの近くに寄った。みんなは言った。「トマスさん、おまえは死んじゃいないぞ。」

「どうして埋められるものか。」

「誰もランステファンにおまえさんを埋めはしないよ。」

「トマスさん、帰ろう。」

「お茶代わりに強いビールもあるぞ。」

「それから菓子も。」

でもおじいさんは橋の上にとっぴかた立って、鞆を脇にとっぴかた握り、流れる川と空を見つめていた。疑念のない予言者のようだった。